

令和3年度学校評価 自己評価書

具体的目標→◎…達成, ○…ほぼ達成, ●…未達成 令和3年所見→□…達成, ■…未達成

対象	重点項目	具体目標	令和3年度末	
			令和3年所見	改善策(今後の取組)
総合評価	(前表に掲載)		その年の学校経営を十分周知した上で、教育活動に取り組んでいる教職員は残念ながらそう多くないと考えている。なぜなら、学校教育目標の具現化に向けて、教職員個々が自らの責任で職務を遂行する意識に欠ける部分があるからだ。本校の学校評価は、学校教育目標の達成に向かって教職員個々がその大きな柱の1本を担当し、知恵を絞り、教育活動に臨むスタイルを継承している。学校評価を学校経営の基軸として据え、職員全員がスクラムを組んで取り組む形になっているからこそ、「学校教育目標」がより実現可能なものになっていると感じている。校長や教頭をはじめとする一部の人間だけでは到底無理なのである。更に、一昨年度から始まった学校運営協議会の発足に伴って、地域のより多くの教育力を児童のために使うことができるようになってきている。 さて、今年度は、昨年度と同様、11の重点項目と16の具体目標を定め、取り組んできた。残念ながら昨年から続く新型コロナウイルスの影響を大きく受けているため、例年に比べ、多くの制約を受けながらの取り組みとなったが、与えられた状況下で出来得る限りの取り組みを行ってきた。その結果、4つの項目を除くすべての目標について「達成」という結果を残すことができた。「ゴールの設定」については、子ども達の日常生活の中で十分定着してきた感がある。授業は勿論、児童会による集会時のゴール設定・振り返りや校外行事・自学などにも見られるようになってきている。自分が目指す部分を具体的に設定することが習慣化されてきていることによって、学校生活のみならず、家庭においても「目標」を持った生活ができてきているのだと思われる。また、こういった児童の意識は、つなげる日記による日々の振り返りや、自らの命を守る活動、勤労活動、体力の向上などをはじめとする健康な生活への意識についても多くの影響を与えているであろうと考える。また、本年度のメッセージにもあるように、読書量を増やし、人の話をしっかり聞き、そして考えていくという学力の基礎になる部分についてもしっかりと取り組めたと考えている。本校を訪れるアドバンスティーチャー(県の若手教員育成事業の一環)が「田富小の児童は、教師や友達の話をよく聞いている。学習している態度が非常に落ち着いている」と常々話してくださっている。そういったところからも取り組みの成果が上がってきていることがわかる。今年度達成できなかった課題となっている部分は、「つなげる日記」の継続的活用とチェック、児童の給食残債量の縮減、保護者のHP閲覧数の増大である。つなげる日記については、児童の学習時間の確保と職員の勤務時間の確保の2つに課題がある。特に、急にチェックしている教職員の姿を見るが、退勤時刻を過ぎてからの仕事量のかなりの部分を占めていることも事実であるので、働き方改革も含めて、考えていく必要もある。学校HPについては、目下リニューアル中である。本年度は、GIGAスクール元年であり、学校に関するICTについても様々な部分で見直しが図られている。現在ネット上で閲覧できる田富小HPはいささか見にくい感が否めないのも、HPを新しくすることで、閲覧者の増加も見込めるであろうと思われる。最後に、本年度より保護者アンケート及び児童アンケートについては、オンラインによる回答に移行した。これは、本年度より児童一人一台端末が導入されたことにもよるが、紙ベースでの集計による資源の無駄遣いを無くし、集計のための教職員の負担を軽減することを目的として行った。集計作業も大変スムーズであり、これからの学校評価に新しい一歩を踏み出すことができた。	・詳細な実態調査の必要性は大切であるが、調査結果をもとにしてどのように取り組むべきかという点について、実効性のある具体的な方策が不明瞭な項目もあるので、PDCAサイクルのA(アクション)及びP(それを踏まえた新しい計画づくり)をしっかりとものにしていく必要がある。 ・中間評価を目標ごとに行い、取り組みを振り返りさらによりよく改善する。 ・板書やノートの書き方及び清掃や給食の配膳のスタンダードを使って、全校で統一した指導を行うことで、児童が見通しをもって主体的に学習したり生活したりすることができるようにする。また、そのための母体となる学級集団の質の向上を図る。 ・あいさつや清掃については、児童会の取り組みによりかなり改善が見られるようになった。これは、活動としての評価だけではなく、全校のリーダー学年としての集団の質によるところが大きい。表面的な活動だけに目を向けるのではなく、それらを推進していく子ども達で組織する集団の育成に個々の教師が努めていく必要がある。さらに、指導に当たっては子弟同行を基本とし、具体的な姿で教えるようにする。 ・ヘルメットの着用やネット・ゲーム対策については、保護者との連携・協力が不可欠である。学校だよりなどのお便りで呼びかけたり、資料を配布したりして、保護者の意識を高めていく。また、PTA総会や学年部会などで呼びかけていく。さらに、生活アンケートの結果をもとに、個別懇談で児童の実態を伝え、連携して指導を行う。よりよく保護者に伝えるために、次年度より2学期も個別懇談を行う予定であり、こういった機会を積極的に利用していく。 ・感染症の影響を考慮しつつ、学校運営協議会の取り組みをさらに充実させ、地域の人材や教育力を活用した教育活動より実施していけるようにする。

社会 を 生 き 抜 く (生)	1	自立の 基礎を 培う	○目標をもって学校生活を送り、振り返りにより自己の成長や新たな目標に気づく子供の育成。	□学校評価の児童アンケート「あなたは、目標をもって学校生活を送っているか」という問いに、『そう思う』と回答した児童は65.5%であった。『ややそう思う』の30.7%を含めると96.2%に達し、昨年度比5ポイントの上昇となっている。本校の児童は目標をもって学校生活を送っていると言える。 ■職員アンケートの「つなげる日記を計画的に書かせ、チェックを入れていますか」という問いに、肯定的な回答をした職員は85.7%であったが、否定的な回答をした職員が15.3%であったので、改善の余地がある。	◆来年度も、集会や授業等の各教育活動の場面においてゴールを意識させた取組を継続していく。児童会による整列、評価、次回の目標提示により、児童が主体的に式や会に参加することができた。本校の伝統としていきたい。また、避難訓練などの際にも、上の学年の児童が、整列の指導等ができるようになると、より価値のある取組となる。 ◆つなげる日記については、継続的に以下の方針のもと指導をする。自学の内容として紹介する、日記を書く視点をノートに貼らせる、定期的に重点となる視点を提示する、キャリアパスポートを作成する際に自己の変容を振り返る資料をして活用する。教師は、負担とならない範囲で、紹介したり、チェックを入れたりして、意欲喚起を心掛ける。
社会 を 生 き 抜 く (生)	1	自立の 基礎を 培う	○基本的な生活習慣を身に付けた子供の育成。	□ネット・ゲームの使用に関して、年3回保護者への調査を行った。 ①平日1時間以上・休日2時間以上している児童は11月調査では16%(毎日12%・6日4%)、1月調査では20%(毎日12%・6日8%)であった。 ②9時を過ぎても使用している児童は、11月調査では8%(毎日5%・6日3%)、1月調査では9%(毎日6%・3%)であった。 今後も、ネット・ゲームの使用に関して、ゲーム脳、ネット依存の防止、望ましい生活習慣の大切さなどに、便り等で保護者への啓発に努めていく必要がある。	◆年度初めのPTAの折に、「ゲームとスマホの田富小の基本ルール」について伝え、保護者の意識の向上を図る。 ◆5学年にて、情報機器・端末の正しい使い方について親子で学習する機会をもつ。 ◆年に3回ほど、定期的の実態調査を行いその結果を保護者に報告する。また、目標が守れない児童には、学級担任より児童に指導したり、家庭訪問・個別懇談等の機会に保護者に改善を促したりする。
社会 を 生 き 抜 く (生)	1	自立の 基礎を 培う	○自分の命を守ることができる子供の育成。	□保護者へのアンケート調査の結果、ヘルメットの着用率は56%から70%に、所有率も70%から84%に、改善された。また、保険の加入率も66%から75%に増えている。便りなどで、ヘルメット着用や自転車保険加入の必要性を伝えてきた成果であると考えている。	◆実態調査を行い、自転車乗車時の児童のヘルメット着用と、保護者の自転車保険加入についての意識の向上を図る。そしてその結果に基づいた指導を行う。低学年における指導や取組を重点的に行う。 ◆関係機関の指導者を招聘し、3学年にて自転車の安全教室を実施する。
			◎みんなのために働くことのできる子供の育成。	□学校評価の児童アンケート「校内をきれいにしよう」と取り組んでいるか」の問いに対し、肯定的な回答は98.9%となった。また、「そう思わない」と回答した児童は0.3%から0.0%となった。目標の98%を上回り、学級での普段の指導や児童会の取組のSTSZ(S:静かに、T:丁寧に、S:隅々まで、Z:時間を守る)のZが加わり、さらに浸透していたことが分かる。 □学校評価の児童アンケート「クラスのために当番活動や係活動に取り組むことができたか」の問いに対し、肯定的な回答は97.1%となった。目標の95%を超えることができた。学級指導の結果、子供たちに自分たちの活動として意識され、目標設定ができていたようだ。 □学校評価の児童アンケート「委員会活動は、充実した活動になっていると思うか。」という問いに対し、肯定的な回答は97.2%となった。目標の95%を超えることができた。昨年度と同様に目標を達成することができた。また、「そう思わない」と回答した児童は0.5%から0.0%となった。6年生がリードしながら、委員会活動の充実した様子が見られる。	◆来年度も、児童会活動とともに取り組む。年度当初の職員会議で掃除のやり方を確認する。さらに清掃について学級会で話し合ったり道徳の勤労・公共の価値項目で清掃について取り上げたりする。 ◆当番活動と係活動の違いを確認し、指導に当たる。学級目標との関連を意識した児童の活動が行われるようにする。 ◆担当を中心に児童会活動や委員会活動の目的や学校教育目標とのつながりを確認し指導に当たる。児童が1年間の目標や活動内容を話し合い、主体的に取り組めるようにする。また、定期的に活動を振り返り、意欲が保たれるようにする。

確かな学力(生)	2	聞いて考え、語り合う子を育てる	○話している人を見て、考えながら最後まで聞くことができる子どもの育成。 ◎聞いて考えたことを語り合い、学びを広げたり深めたりすることができる子どもの育成。	□2学期終了時点で、「あゆみ」の「生活のようす」の「落ち着いて人の話を聞くことができる。」の評価が「◎○」の児童は、93.1%であった。目標は90%以上であったので、目標は達成され、昨年度と比べても1.5%ほど改善した。その原因として、各学級において聞き方についてのめあての確認をしたり、振り返りをしたりの活動を、1年を通して行ってきた結果だと思われる。 □学校評価の児童アンケート「あなたは授業中、友達の話聞いて自分の考えをより良くすることができますか。」の質問項目に対し、肯定的な回答は92.8%であった。目標の90%は達成されたが、その原因としては、各学級での話し合いが積極的に行われ、子どもたち同士が考えを交流し合うことで、学びを広げたり、深めたりすることができた結果であるということが考えられる。	◆子どもの発言がにつながる授業を心掛ける。また、「よい聞き方カード」を使って「話している人を見ていたか」「最後まで聞いたか」「考えながら聞いたか」などを授業の中で振り返らせ、継続的に指導する。 ◆児童が考えをもつ時間を保障する。ホワイトボードやICT機器などを活用し、ポイントを絞って説明できるようにする。 ◆授業中、小グループでの話し合いを取り入れる。少人数により話したり聞いたりする機会を保障し、注意深く聞く態度を育てる。
	3	読む子を育てる	●本が好きな子供の育成。 ○音読したり暗唱したりすることを楽しむ子供の育成。	■うちどくカレンダーに月の半分以上○が付く児童の目標を60%に設定した。読書週間前後の月の達成率は全校平均が60%を超え、昨年より10%以上も上回る月が多くあった。全体の6割のクラスがほぼ毎月達成率していて、読書が習慣化してきていることが分かった。これは、長年根気強く取組続けてきた成果だと思う。クラス間のばらつきと読書週間以外の月や長期休業中の達成率の差が課題である。高達成率だったクラスでは、身近な大人が関わりもっていることが分かった。家庭の読書への関心向上の取り組みを継続し、全校の達成率60%を目指したい。 □音読カードや暗唱カードを活用し、名詩名文や物語などの暗唱に積極的に取り組んだ。学校評価の児童アンケートによる「1学期、2学期に、それぞれ1つ以上の詩や物語を暗唱することができましたか」という問いに、肯定的な回答は84.9%であった。好きな詩や物語の一節を暗唱できる児童を各学級85%以上にするという目標は、ほぼ達成できたといえる。また、今年度はオンラインによる「全校暗唱発表会」を開催した。暗唱に積極的に取り組んでいる児童の姿を、全校で交流することができ、今後の意欲向上につながるよい機会であった。しかし、暗唱への取り組みには、学級間のばらつきも見られた。授業内容と関わらせながら、児童が暗唱したくなるような名詩名文を提示したり、暗唱に取り組む時間を確保したりして、さらに達成率を上げていきたい。	◆「ミニミニ読書週間」「私の好きな名詩・名句紹介」「図書委員によるお昼のお話CD」を実施する。「うちどくカレンダー集計表」などをもとに分析し、学級毎の対策を考え実施する。家庭の読書関心向上の為、うちどくコメントの図書だよりへの掲載、親子読書保護者からのおすすめ本掲載、うちどくパーフェクト賞児童を発表する。 ○児童が暗唱したくなるような名詩名文の提示や授業内容と関連させた取り組みを、さらに進めていく。また、授業での取り組みの他に、暗唱係を決めるなどして、年間を通して、朝活動や朝の会の時間に自主的に取り組むことができるような場をつくっていく。今年度行ったオンラインによる「全校暗唱発表会」を継続し、互いに暗唱の成果を交流する機会を設けていく。図書委員による名詩名文の紹介なども引き続き行い、暗唱への取り組み意欲を高めていきたい。

4	確かな学力を支える授業づくり	○毎時間ごとのめあての達成に向けて、自ら問いをもち、仲間とともに学び合う授業の実施。	□田富小の授業の進め方「田富スタンダード」が教員だけでなく児童にも定着し、授業の目標や学習課題、まとめを児童自ら設定する姿が見られるようになってきた。学校評価の児童アンケート「勉強する力が伸びたなあ」という問いに対し、肯定的な回答は、92.8%であった。昨年度より4.8%改善し、目標の90%を達成することができた。毎時間の授業において、どの学級でも「田富スタンダード」に沿って授業を進め、自ら問いをもち、仲間とともに学び合う授業を実施してきたことや、学力向上委員会で情報共有をし、TTを活用して個に応じた指導を行ってきた成果だと考える。	◆学校全体として定着した学習スタイルを年度を超えても田富小学校として継続していく。年度当初の職員会議で田富スタンダードについて共通理解をもち、全学級における全授業で徹底して実施できるようにする。 ◆生活経験や既習事項とのずれから生まれる児童の問いから課題を設定し、児童が自分との関わりを感じ、必要感をもって学べるようにし、まとめを児童の言葉でまとめ、学習の成果を実感させる。 ◆各種学力検査の結果を分析し、落ち込みが見られる学習内容について共通理解をもち、ピックアップ問題や「学び」のふりかえりを活用したり、校内研究の提案授業や一人一実践で取り組んだりしていく。 ◆1学期中に学力向上委員会を行い、情報を共有し、TTを活用して個に応じた支援を行っていくことでさらなる学校全体の学力向上につなげていく。 ◆授業力の向上に向け、板書記録による振り返りや相互の授業参観を行う。
	5	自ら学ぶ子を育てる	○進んで家庭学習に取り組む子供の育成。 □家庭学習に取り組む時間について、達成目標値を84%以上と設定した。全校平均値は83.7%でほぼ達成されたことになる。昨年度の80.3%よりも上がっており、取り組む時間を意識して学習できる児童が増えてきたことがうかがえる。低学年は91%、高学年は77%の達成であった。 □「やってみるじゃんノート」の取り組み量の達成目標値は80%以上と設定した。全校平均が80%であり、目標を達成できた。低学年92.5%、高学年が78.5%であった。量的にも時間的にも、学年が上がるに伴ってまとまった時間を継続して学び続けることに困難さをもつ児童が増えきていると考えられる。高学年になると学習内容も難しくなるため、すべての児童がその子に合った方法で家庭学習に取り組めるよう、よりきめ細かな支援が必要である。	◆引き続き「家庭学習力の様子」カードを用いて、自身の家庭学習についての振り返りを行い、次への目標をもてるようにする。また、保護者に家庭学習の大切さを伝え、児童の取り組みの様子を共有していくことも継続していく。 ◆2学期末の段階で目標を達成できていない児童には、学習内容や学習方法について個別に支援していく。 ◆「やってみるじゃんノート」の学習内容についても振り返ることができるようにしていきたい。
	6	心の居場所と支え合う学校生活	○安心して楽しい学校生活を送り、気持ちよく活動できる学校作りと支援体制の確立。 □学校評価の児童アンケート「学校が楽しいか」の問いに対し、否定的な回答は6.6%だった。5%未満にするという目標は厳密には達成されていないが、1学期は3.7%、平均すると5.15%という数値から考えると、ほぼ達成されたといってもいいのではないだろうか。一人一人の気持ちを把握し、個々に聞き取るなどして、いじめの解消、学級づくり、保護者へのきめ細かい連絡等に努めてきた成果だと考える。 □学校評価の児童アンケート「何かあったら先生に話しているか」の問いに対し、肯定的な回答は87.2%だった。目標の90%には届いていないが、令和になってから一番高い数字である。コロナ対策で黙食やソーシャルディスタンスの影響が心配される中、子ども達の気持ちに寄り添い、よく話を聞き、つながりを深める地道な取り組みの成果だと考えられる。	◆来年も学期に1回「生活アンケート」を実施し、いじめの早期発見・対応に努める。 ◆年間2回のQUの結果を学年で分析し、ルールと信頼関係に基づく学級づくりに努める。 ◆職員会議や校内委員会で情報を共有し、全校体制で指導に当たる。 ◆互いに認め合い、自己肯定感を高める取り組みを各学級で実施する。担任は児童の行動を価値付け、全体に広げる。 ◆言葉で気持ちを伝えたり助けを求めたりできるようにする。相手を傷付けるような言動は見逃さず、その場で指導する。また、学級活動や道徳の授業、校外学習における事前指導、全校集会等で継続的に指導を行う。

豊かな心 (信) (命)	7	地域とつながるあいさつの活動	○学校・家庭・地域で、あいさつができる子供の育成。	□学校評価項目の保護者アンケート「あなたのお子さんは、あいさつがよくできていると思うか。」という問いに対し、肯定的な回答が全体の85.3%、否定的な回答が14.7%だった。昨年度は肯定的な回答が87.3%であったため、肯定的な回答が若干減少し、目標の90%以上を達成することができなかった。今年度、児童会活動の3つの柱の1つにあいさつの内容を設定して取り組んできたが、1学期は、まだ新型コロナウイルスの感染対策も行う中で、なかなかあいさつに対する取り組みができたなかったことが要因として挙げられる。2学期後半からは、6年生への呼びかけや、あいさつのお手本動画、おはタッチ運動などあいさつに対する取り組みを重点的に行ったこともあり、比較的あいさつをする児童が増えてきている	◆来年度も児童会を中心に、児童が主体的にあいさつができる取り組みを考えて取り組み、感染症の様子も見ながらになるが、できる限り早めに取り組みを始める。 ◆継続的な指導が重要であるので、地区別集会等、機会を探しながら定期的にあいさつに関する声かけをしていく。 ◆一番身近な大人である教職員が率先して児童や来校者に対して進んであいさつをしていき、見本となる。
	8	共生の教育	◎多様な他者を知り、尊重し、折り合いをつけながら目標に向かって共に学び共に活動できる子供の育成。	□全校児童へのアンケート「誰とでも仲良く協力して活動しているか」という問いに対し、肯定的な回答は、高学年が93%、低学年が94%であった。昨年度同様、90%を超える結果となり、目標は達成できた。質問の「誰とでも」の部分に多文化共生、多種多様な他者理解があるととらえている。フレンドシップ委員会の活動を中心に全職員の共通理解の下、多言語や多文化にふれる機会をもち、広く周知する活動を続けている成果だと思われる。児童も「おはよう」「さようなら」「ありがとう」の代わりに「チャオ」「グライアス」「ラーコン」などでのあいさつも見られた。	◆多種多様な児童の背景に迫り、日系人とは何であるのかの理解に努め、他者理解、多文化共生、国際力を身につけた児童の育成に引き続き、努めたい。 ◆コロナ禍での活動の模索を引き続き考えたい。 ◆職員会議などにおいて、全職員で児童についての共通理解を図り、指導・支援にあたっていく。また、いろいろな児童が活躍できる機会や場を各学級や委員会活動、行事等で意図的に設けていく。
健やかな体 (命)	9	体力向上	○自ら運動に親しみ、体力の向上に努める子供の育成。	□5月の50m走では、全国平均を上回っていた児童は全体の47%であった。12月の50m走では、全国平均を上回った児童の割合は、1年生(81%)、2年生(90%)、3年生(64%)、4年生(75%)、5年生(73%)、6年生(70%)となった。全校平均75.5%となり、当初の目標であった65%以上をクリアすることができた。この結果から、体育委員会で作成した速く走るのポイントとなる掲示物を作成したり、授業で走る時間を増やしたりしたことが達成につながったと考える。	◆引き続き授業の中で走る時間を確保し、体育委員会を中心に休み時間に外遊びを呼びかけをしていく。 ◆来年度もコロナ禍での運動活動が予想される。感染対策をとりつつ、楽しみながら体を動かせる企画や走り方教室等の取り組みを体育委員を中心に作成していく。
	10	食育の推進	○食に対する関心をもち、健康な体作りに努める子供の育成。	■残菜調べの結果から、一人当たりの残菜量は平均で30.8gであった。目標であった年間平均30g以下には及ばなかった。しかし8月の残菜量は37gで12月は25gと大幅に減少していた。食に関するアンケートでは「苦手なものを一口でも食べている」という児童が6月は90%で2月は93%で増加しており、残さず食べようとする児童の意識の向上が見られた。日々の教育活動全体で食育の指導をし、得られた成果だと思われる。	◆献立紹介、手作り弁当の日、給食週間などを通して食に対する関心を高めていく。 ◆残菜調べを定期的に行い、その結果を活用して食べ物の栄養のことや給食にはたくさんの方が関わっていることなど考えられるように、給食委員会を中心に動画の作成や取り組みを行っていく。

信頼 される 学校 (信)	11	積極的 な情報 発信と 連携	○保護者や地域に対する積極的な情報発信の実施。 □学校評価の保護者アンケートの「学校は適切な連絡や情報提供を行っているか」の問に対し、肯定的な回答は96.5%だった。コロナウィルスの影響もあり、養護教諭を始め、各教員が児童の体調の確認や連絡を綿密にとったことや、日ごろから些細な事であっても子どもが帰宅する前に保護者に連絡するということを、心がけて行ってきた成果であると思う。 ■「学校の情報を得るためにHPを閲覧したか」の問に、肯定的な回答は71.5%だった。保護者が気軽に閲覧できるようQRコードをお便りに掲載したこともあり、前年度に比べて肯定的な回答が増えたものの目標の80%には及ばなかった。昨年度と比較しブログの閲覧数は確実に増加しているが、日々の忙しさもあり、更新頻度をあげられないことが課題である。	◆来年度も学校だよりや各クラスの学級通信等を定期的に作成し配布する。 ◆お便りをWeb形式にして、気軽に閲覧可能できるようにする。 ◆日常的に児童の安全確保や健康管理について、緊急メールや電話により迅速かつ適切な情報の提供を行う。 ◆各種届の様式や学習コンテンツなど保護者や児童が必要とする内容の充実に努める。 ◆各学年のブログの更新について、担当が定期的に確認する。
------------------------	----	-------------------------	---	---